

「古今和歌六帖と万葉集」

安 藤 和 幸

要 旨

『古今和歌六帖』の伝承歌がどういったものか。万葉集が人麿以外の人の名を付す歌が、六帖が人麿と注記するのは、現存しない柿本集を六帖が採歌資料とした等を論じた。

一 始 め に

六帖歌の出典を洗い出し、諸本所載の本文を並列して書き付けて行く。六帖に諸本があり、万葉集にも柿本集にも諸本があり、干首を越える歌の異同を見て揺れをどう考えてよいのか、厳密性を留意すると何年も掛かる。揺ぎなさを期すとは、一から千までを二回、三回と点検することであるが、その拘りは、計数を二千三千と極めて行っても浅学菲才故の至らない見通しに帰すだけと痛み入っては、拘りはほどけて。或は四千五千の数字を電卓で弾いて合算し割ったりして、見晴かす頂上を自分なりに極めんと、胸突八丁を想いつつ森に分け入って道を失い、漕てなく続く太古からの樹木を闇の中に見ていると今まで経験したことのない恐怖に憑かれたある日のこと。無意味の拡がり。自分がそんな際どい所に

居るとはついぞ思ってもみなかった。しかし、歩くしかない。

以下、杜撰な工程による覚束ない見通しにしか過ぎない。学にもとる飛躍もあるだろう。工程に使用する書、論は次の通り。

- ① 古今和歌集六帖 「国歌大観」 対校に「図書寮叢刊」「国歌大系」
- ② 万葉集 塙書房刊 対校に「国歌大観」
- ③ 柿本集・赤人集・家持集等 「私家集大成」
- ④ 二十一代集 「国歌大観」
- ⑤ 夫木和歌抄 「作者分類」
- ⑥ 『契沖全集』第十五巻 六帖書入
- ⑦ 大久保正 『万葉の伝統』 昭和三二
- ⑧ 後藤利雄 『人麿の歌集とその成立』 昭和三六
- ⑨ 平井卓郎 『古今和歌六帖の研究』 昭和三九

- ⑩ 中西 進 『古今六帖の万葉歌』 昭和三九
- ⑪ 島田良二 『平安前期 私家集の研究』 昭和四三
- ⑫ 大久保正 『万葉集の諸相』 昭和五五
- ⑬ 後藤利雄 『仮字万葉と見た赤人集及び柿本集一部』 「国語と国文学」第三百十号 昭和二五
- ⑭ 老川義治 『古今六帖と万葉集（人麿訓点篇）』 北大「国語国文研究」第九号 昭和三一
- ⑮ 河野頼人 『万葉歌の伝誦』——古今和歌六帖にみられるその類型の指摘をめぐって——北九州大学文学部紀要七号 昭和四六
- ⑯ 阿蘇瑞枝 『人麿呂の伝承と享受』——古今和歌六帖における人麻呂歌
- 『論集上代文学』第三冊 昭和四七
- ⑰ 山崎節子 『人麿家集の成立と拾遺集』 「中古文学」第二四号 昭和五四
- ⑱ 熊谷直春 『梨壺における事業の再検討』 早大「国文学研究」第七〇・七一集 昭和五五

二 古点から六帖へ

我等が愛する近江の君が、源氏物語常夏巻末で異母姉弘徽殿女御に書き贈った何とも噴飯ものである手紙。語り手のことは、いと草がちに怒れる手。又文に目を通した女御のことは、草の文字は見え知らねばにやあらむ、本末なくも見ゆるかなの「草がち」「草の文字」とはどういう字か。中国の字音を日本化した、一字一音の所謂万葉がな。もしくは、かたかな・ひらがなに至る崩したり、省いたりする流動過程の字。近江の君の出自は明らかでないが草莽に生い育ったよう。古今集仮名序で貴

之をして慨嘆させた「色好みの家に埋れ木の」有様の一つとして近江の君に注目すると、その文字は宮中に行き渡ったかな文字の世界に対して女御が与り知らぬ草の文字の世界のもの。かつては宮中で使われ長の年を経てやっとそれが宮中から民間の広域に伝播したもの。その文字によって万葉歌や古歌が書き写されていた、更に自らの歌や手紙も書かれた。そう推定する。市井といってもある限度で考えねばならぬだろうが、それでも卑賤の者にまで万葉歌や古歌が、或は古今集や六帖が草書きで翫ばれていた。他愛のない空想だろうか。

万葉卷十四の三三七三

多麻河伯尔 左良須豆久利 佐良左良尔奈仁曾許能兒乃 己許太可奈之伎

この表記は何とかぼくでも読める。こうした読み易い歌などが手本として用いられたと考える。ところが次の歌では訓めない。

万葉卷十の二三三九（人麻呂之歌集出）

金山 舌日下 鳴鳥 音谷聞 何嘆

「金山」を「あきやま」と知らされて驚く。もともと⑮によると元暦校本、類聚古集「かなやま」で平安時代の訓をそれと知る。六帖「かね山」、類従本柿本集「こかね山」、異本柿本集「かみやま」とし細字傍書で「あきやま」とあると示す。

所で平安時代において万葉集が読めなくなったとは、歌意がとれなくなったというのではなく、それ以前のこと、即ち万葉がなをひらがなに置き換えられなくなったということであつたが、平安人にも右の卷十四の歌は訓めただろう。となると卷十の如き歌が、どういう「てにをは」や助動詞を送つてといったことではなかったのか（難訓を釈く課題は言うまでもなく）。

更めて説き起こすまでもなく、万葉を訓む事業は天皇のお声がかかりて後宮で行われた。即ち、天暦五年（九五二）十月三十日、村上天皇の詔命によって梨壺（昭陽舎）に撰和歌所が設けられ施訓が行われた。広幡御息所の強い要望によつたと十訓抄は記す。この梨壺の五人による事業、後撰集選集も併せ行われたとの従来の理解に⑮がそうではないと異議を立て、こう論及する。

『万葉集』の事業の方は、天暦五年十月三十日奉詔、同七年十月頃完成（作業期間二年）、『後撰集』の事業の方は、同八年五月奉詔、同九年八月上旬完成（作業期間一年半）である」

大胆な提言である。何故と言つて、確かに天暦五年に事業が開始された資料はあつても、いつ完了したかの資料はないからである。後撰集が現に残されているから、いつであるにせよ完成したのは間違いないとの揺ぎない事実も、四度計ない本文、内容故に未定稿と見做す等、古来論議を呼んでいる。

一方施訓を付されたかな万葉集、仙覚が名づけた古点はどうなのか。こちらは遺されていない。⑯の教えを受けると、一々全部検出することは、今日ではほとんどまず不可能であると言ふ。

天暦五年（九五二）から六帖成立の貞元元年（九七六）からまもない時まで。六帖が現に示している四五〇〇首ほどの歌、古くは記紀歌謡から（例えば第一帖雲92の、本邦最初の歌とされる素盞男尊の「八雲立つ出雲八重垣……」、又丹波風土記逸文とほぼ重なる第五帖たまくしげ95）、上限として考える微子女王の歌まで、系統立った配列と歌題のよく練られた梓取りのもと、数多くの資料から採歌されている。企画から完成まで何人の手を煩わしどのくらいの歳月を要したのか。後撰に似て、古今とは異つてやや体裁が悪い。粗い仕上がりである。重出する歌のいくつが、殊に第一帖のこりの雪に十首ある歌は、第六帖うぐひすにも載る。

又後世の校合者をして四度計ないと嘆かせる本文の乱れや、作者注記が付されたり、付されなかつたりの不統一又は誤り。粗く仕上げられたのか。

梓取りは、歳時「春夏秋冬」に始まって、天、山、水、恋、草、木、鳥と秩序立っている。梓取りから歌題が細分化され、歌題のもとに採歌されたのだろう。作歌の手本となる詞華集（アンソロジー）。かなり大規模な事業で、多大の労力と時間がかかる。編者は誰なのか、決め手となる証拠がなく、兼明親王や源順が擬せられている。一人の手で編まれたのだろうか。宏大な事業の規模は効撰集を編むに劣らない。組織された人々による鋭意を傾けての作業。万葉は古点の成果を取り入れ、後撰は……諸本と六帖に載る本文を照合して本文異同の揺れを追つても時に六帖独自の本文を浮き立たせる処となる。古今と六帖の文本のぶれはあるにはあつても後撰と六帖のほどではない。一例をあげると、

後撰 春下85 伊勢

垣越に散り来る花を見るよりは

根ごめに風の吹きも越さなん

四句「風の」が「風は」と定家本一本にあり、二荒山本だけ「根こし」を作り、二句定家本一本「散りける花を」を作る。

六帖二隣97 伊勢

垣越しに見ればかひなし桜花 下句右同

〔伊勢Ⅰ〕

かきこしに見れともあかす桜花

ねながら風の吹もこさなむ

〔伊勢Ⅱ〕

かきこへに見れともあかす桜花

ねながら風のふきもこさなん

〔伊勢Ⅲ〕

かきこしに見れともあかぬ梅花

ねながら風のふきこさなん

二句細字傍書「ちりくる花を見るよりは」

後撰が独自の本文を二・三句に持っている。六帖は後撰を受けていながら確かな連接を本文の上で成していない。といっても必ずしも六帖のしどけなさを言えない。このことは作者名についても言える。私家集・歌合等と六帖、後撰が重なる歌の作者名異同は、多くはないがいくらかのずれをそれぞれが有している。どう考えたらよいか。

後宮の教養高い女性達がかん書き万葉集を求め、後撰集を求めたとは既に言われているが、六帖にしても変らない。

天暦五年（九五二）から貞元元年（九七六）まで二十五年の隔たり。村上から円融へと御代は変わり、四十一の学生源順は六十六。古点訓続作業・後撰集編集が天暦五年から大幅に完成まで遅延して、古今六帖も多大の労力を要したので、或は一つに連なり続くのではないかと見る可能性を、熊谷直春氏の従来言われて来た梨壺五人の事業を大胆に否定した論に触発されて追ってみたが、うまくゆかない。

熊谷氏の論を全体として問うことが主眼ではないが、次の点についてだけこだわりたい。熊谷論の起点に、国歌大系本順集の詞書「天暦五年宜旨ありて、始めてやまと歌えらぶ所を梨壺におかせ給ひて、古万葉集よみときらばしめ給ふなり」の吟味があるのだが、手許の日本順集はそうあるが、日本順集には「よみときこえはしめたまふ」とある。「よみときえらばしめ」の誤写なのか。実は日本巻末に、老境に己が人生を顧

て、「そもそも、梨壺には奈良の都のふるうたよみときえらひたてまつりし時には」とあるので、「訓解開始給」はありえず、「選」が言われている。その選は後撰集に載せる歌を選ぶのでなく、万葉集を選ぶこと。熊谷氏のことばで言うところ「天暦の頃の『万葉集』は、確かに本としての体裁はもっていたであろうが、それは歌集の資料集のようなまとまりを見せていたにすぎないために、不要の所を削り、足りない所を補ったりして、歌集としての体裁を整えた、『万葉集』全体に及ぶ修撰であった」。

そうだろうか。次のように考える。万葉仮名の伝本はあった。集歌全体に及んでひらがなに置き換える作業と選集に載せる歌のより分けが行われた、「選ぶ」作業。歌集体の資料集といえる貫之の万葉訓釈はあったろう。それが参照され、時に修正され、しかし多くは初めて訓が施された。全歌に及ぼんとして及び得たのかどうか。ともかく万葉選抄が編まれた。しかし後宮は更に多くを読みたいと要請し、巻十を中心としたまとまった歌集が成立する。赤人集及び柿本集の一部がそれであると⑬や⑭が立証している。更に大幅な増補が加えられて日本柿本集が作られた。六帖成立前に、⑫は『後撰集』は天暦九年の頃に成立したと認められているのに対し、古点の事業は難事業であつたらしく、多大の年月を要し、十年ほど遅れて康保年間に及んだと推定される」とする。

二年で完成したのか、十五年遅延したのか。近江の君を思い起こすなら、日常の場での使用文字が万葉仮名である程度は読めた万葉集。原文の脇にひらがなが書かれていた原本万葉集の流布。考えられることと⑭は言う。

いずれにせよ「選ばれた」万葉集として梨壺の五人の作業を把握したい。長歌は省かれ、訓み残された歌も省かれた。その歌数は六帖の万葉歌一二六〇首を越すものであった。そして六帖は古点を受け継いだ。古点から六帖まで本文改訂や、訓の増補があつたのか。所謂伝承歌を資料

とした歌や、照合すれば源泉は万葉集に発してると思われる私家集、古歌集を資料とした歌もあった。この混淆を攪拌し分離・分類できないか。些細な試みを次に行う。

三 六帖の人磨歌

⑦以下の論考を脱けて新たな見通しを示せない。せいぜい細部を正し、既にある資料を使つて大まかな数字の別資料を示せる程度。その数字のいくつかは、無効になりかねないきわどいもので、右の問題を解くには今後もっと別の新たな発想と方法とを必要とする。

以下⑩を取り上げて数取りの怖さを明らかにしたい。⑩はきめの細かい論証をことば正しく重ねた、並を脱けた高い水準を獲得している。まず⑭の誤りを論証している。⑭は六帖が注する人磨歌について、その範囲を勅撰が取った作者表記の理解で、その歌の所属する題下の後継する作者付記のすべてにかかると見なし数え上げたが、今日では作者注記は一首に限る原則が確認されている。⑯はこうして六帖が注記する人磨歌を一一〇首認定する。別に万葉集における人麻呂作歌および人麻呂歌集所出歌は九十首にのぼるという。私の試算でも九三首(表四と表二を使つて割り出すと人麻呂作歌は二〇―一三二―一七首。歌集歌が一二五―四九―七六首)。

次に一三〇首の全てを掲げて表一を作り、六帖及び拾遺集を含め「この時代の人麻呂歌が、先行歌集所出の人麻呂歌に制約されることがすくなく、かなり自由に伝承人麻呂歌を採用した事実が知られるのである」とする。先行歌集とは万葉集・古今集を言う。

表一 六帖人麻呂歌

合 計	先行歌不明の歌	古 今 集		万 葉 集			
		よみ人しらず歌	伝人麻呂歌	他人作歌	作者不明歌	人麻呂関係	
						歌集歌	作歌
130首	23首	10首		4 首	32首	61首	
		5 首	5 首			46首	15首
		33首		97首			

この示しは既に⑭で行われ、⑦で補強されて⑨が確認するということが、揺がない事実と固まりつつある。それで後を受ける者としては、万葉集によるのか伝承歌によるのか、伝承歌とはどういう実体かを糺さねばならない。今少し⑯の論に沿って迂遠な道を取る。

⑯は又「単に関連の有無というだけでなく、どの程度その先行歌に即しているかを明らかにしなければ、その実状を探ることはできない」として、六帖人麻呂歌と先行歌との関連の程度を次の基準で分類する。

「(一)両者が全く同一のもの。先行歌が万葉集歌の場合、原文表記からそのように訓読でき、通常そのように訓読しているもののほか、原文表記から多少はなれていても、古点次点でそのように訓読されている場合は、古点次点を参照にした可能性のほかに、編者もまたそのように訓読する可能性があったという理由から、同一と認める。なお、この方法は

(二) (四)の場合にもおなじである」

四度計ないと後撰よりも本文について言われる六帖、その実状の解析を数値に置換するに用いる基準がうまく定まらず漂泊していたばかりには右の提示は目の鱗が落ちる誘掖だった。永年厳密に万葉に自己を研磨してきた人の力であろうが、ぼくには飛躍であり豁達であった。

「(二)一、二字の相異にとどまるもの。但し助詞あるいは活用語尾の相違などに関してであって、「妹」と「君」、「今日」と「明日」のごとく意味に大きな相違をもたらずものは含めない。

(三)一句ないし一・五句程度の相異にとどまるもの。

(四)男女の性の交替、地名の転換など伝誦の際変化しがちな相違をもつもの。

(五)二句以上の相違をもつもの。

(六)先行歌集に関連のある歌を見出せないもの」

万葉歌の或本日、一云、或は重出歌から(四)が定立されるし、⑨や⑮も言及している。即ち、何故万葉集で「吾妹子」とある語が六帖では「我兄子」に替るのか、「妹」が「君」となるのか、交替例を網羅し吟味して(四)を結論づけた⑨、それを受けて⑮は他例を上げて肯定している。「志賀」から「須磨」へ、「須磨」から「伊勢」へ。ひずみを同一尺度で計数化しようとしているばかりにとつて、一字一句を揺るがせにしない厳密さより、どう遡つても室町期を見ない、江戸期の書写による六帖の伝本であることから、むしろ豁達に就いて、一字は一字の間違いと考える。しかし、付属語や活用語尾の間違いよりは、自立語のそれは、意味の違いが大きくなることや、違いの事情の奥が深いものと考え、違いの度合いを倍にし、右の基準をもとに次のようにひずみを測る数を決めた。

○ (一) 1 〓 一字二字の付属語、活用語尾の異なり 2 〓 一字の自立語の異なり 3 〓 三字四字五字の付属語、活用語尾の異なり 4 〓 二字

三字の自立語の異なり 5 〓 四字五字の自立語の異なり 6 〓 一句、一・五句程度の異同 12 〓 二・三・五句の異同 15 〓 上句・下句の異同 20 〓 それ以上

このように計数基準が、観点の相違から異なつては、以下どのような緻密な数字が割り出されようとも比較にならない。又、近年の傾向として数取りで作品の解析に就こうと、観点を超えての客観性に拠ろうとの方法が目につくが、所詮観点の相違を蹈晦する(複雑にして訳が分らない)だけのものであろう。

表一に示した「万葉集における他人作家と関係ありと認められる四首」を⑩はこう論証する。「いずれも万葉集からの採歌ではなく、万葉の時代もしくはそれ以後の伝誦歌の一であつて、それがいつの時代からか人麻呂の歌と伝えられたものに違いないと思われるのである」。この四首の異同を實際に上げて考えてみたい。

1 六帖四別 14

思ふなと妹は云へ共逢はむ時

いつと知りてか我恋ひざらむ

図書寮本は桂宮本傍書に「妹」をキミ、桂宮イ本に「あはむとき」をアフコトヲを示す。国歌大観は「別 12」に人磨を記すが「三つ」が無い。

国歌大系・図書寮本に「三つ」とあるのに従う。

I 本柿本集 II 本 III 本 II 拾遺七五六 人磨

思ふなと君はいへとも逢ふことを

いつと知りてか我恋ひざらむ

万葉二の一四〇 人麻呂妻依羅娘

勿念跡 君者雖言 相時

何時跡知而加 吾不恋有矣

(なおもひと 君は言へどもあはむ時

いつと知りてかあが恋ひざらむ)

国歌大観は初句を「おもふなと」とする。

塙本の訓にしろ、(一)を適用すれば、初句の六帖と万葉のずれは0となる。「妹」と「君」の異なりは「4」。⑩は(四)で考える。柿本集・拾遺集が「君」としているので、六帖の「妹」は臨書の写し違いが考えられもする。

2 六帖五かみ13

後遂に君をばまたむ打靡き

我が黒髪に雪はふるとも

II 本柿本集

のちつゐに君をみむとてうちなひき

わか黒髪に雪のふるまで

III 本柿本集

のちつひに君をまつとてうちなひく

わが黒髪に雪のふるまで

万葉二の八七 磐姫皇后

ありつつも君をば待たむ打靡く

わが黒髪に霜の置くまでに

二の八九 古歌集中出

居明かして君をば待たむぬばたまの

わが黒髪に霜はふるとも

⑩は(五)で考える。ぼくは初句の異なりを「6」、五句「雪」「霜」の異なりを「4」とする。6+4=10。10を越すと万葉集に拠ったのではないと見当づける。

3 六帖一雲96

滝の上の御船の山にゐる雲の

常なるべくも非らぬ我身を

六帖二山18 ゆけのわうし

滝の上のみ船の山にゐる雲の

つねならぬとはたれか頼まむ

(図書寮本 つねならぬよを)

II 本家持集

みかのののみふねのやまにゐるくもの

つねならむともわが思はなくに

I 本家持集は二句「やまに」を「うらに」とする。

III 本柿本集

みよし野のみふねの山に立つ雲の

つねにあらむとわか思はなくに

万葉三の二四二 弓削皇子

滝の上の三船の山に居る雲の

常に有らむとわが思はなくに

三の二四四 或本歌人麻呂之歌集出

三吉野の御船の山に立つ雲の

常にあらむと我が思はなくに

六帖一雲と万葉二四二の異なりを、⑩は(四)とし、ぼくは3+6=9で、古点の万葉に拠るのか別資料によるのか断定しにくいと暫定する。

4 六帖五ひも99

我兄子が結ひてし紐を解かめやは

絶えば絶ゆとも唯に逢ふ迄

(図書寮本 初句わきもこか)

万葉九の一七八九 笠金村歌中

吾妹兒が結びてし紐を解かめやも

絶えば絶ゆともただに会ふまでに

⑬は四、「解かめやば」「やも」の異なりは0とする。「逢ふまで」「までに(相左右二)」を1、「わかせこ」「わきもこ」は自立語二字の異なりで4とし、 $4+1=5$ 。万葉からの採歌と考える。この歌も「わかせこ」とする六帖の写書の際の誤りは濃く疑える。

例歌1→4を⑬は四(四)四と認定し、四を「先行歌集から直接した可能性はほとんどなく、先行歌集所収の該当歌と源流をおなじくしながら伝承の間に変化したものと考えられる」とし、(四)を「提示せられた先行歌集所収歌とはほとんど関係なく、本来成立を異にするか、もしくは伝承の間に著しく変化しもはや別の歌となりおせたといつてよいもの」とする。

ばくは4と10と9と5と認めてみた。もつと六帖に好意を示せば、0と10と6と0と認定でき、数字の上からは例歌1・4は万葉集から、2は柿本集、3はどちらとも分け難いと言いたくなるが、作者異同を観点に入れると数字遊びとなってしまう。即ち、仮に古点の補正を得た柿本集を六帖が採歌資料としたとして、その柿本集が歪み値0の歌を載せていたこともありうるわけで、0だの10だのという測定も徒勞に帰しかねない(必要条件たりえても十分条件とならない)。

現存する柿本集ではII本が六帖と近い。しかし⑬が示す一〇四首の拾遺集人磨歌であれ、I II本柿本集に見られない歌が十二首あって別本柿本集があったと想定される。つまりII本と六帖の異なりも参考にはなる

が粗い近似を示すでしかない。仮に例歌1・2の異なりをII本と六帖で測定すると、例歌1は $4+5=9$ 、例歌2は $4+1+3=8$ で、数値からすると例歌1は万葉に近く、例歌2はII本柿本集に近いことを示すが、例歌2はII本に近いことが一目瞭然なのを数で取つてゆくと異なり値8と少くない歪みを示し、II本柿本集で裏を取れないことが分かる(十分条件たりえない)。こうした座標軸の取りにくさは、古写本万葉集と六帖にも言えることで、既に⑭⑮⑯が試み、多く一致するが大きくかけ離れた歌もあり、伝承歌の流れを想起する所となったことは周知の通りである。或は⑮の伝承歌を基本で認める考証や、⑮に教えられる大城富士男氏の「改作」の観点からずれを見た論考(昭和五)等多様な試みがある。

⑯とばくの把握がどちらが妥当かを示すために、ばくの基準で六帖の万葉歌一二六〇首全体に及んで整合すること、又後に素描を示す夫木抄を介在させての洗い出し等、これ以上この先も関わらない(放棄する)。数値と離れ、例歌1→4をめぐるあれこれを若干示したい。

A 例歌2に六帖は一首置いて前に作者注記なしの「有つつも君をば待たむ打靡き我黒髪に霜のおくまで」を載せる。今六帖五の「かみ」の配列に典拠を記して示す次のようになる。

10 万十一の二五六四 作者未詳 拾遺八〇三読人しらず 「人まろ

II III

11 万二の八七 磐姫皇后

12 万十一の二六三一 作者未詳

13 人磨 万二の八七・八九 古歌集

14 万十一の二五三二 作者未詳「人まろII」

15 出典未詳

16 みつね 後撰四六八読人しらず 「みつねI III IV」※六帖「雪重

出

17 万四の四九三 田部櫟子 ※六帖五宵の間重出

18 万十一の二六一〇 作者未詳 続古今一二四五人丸 「人まろⅡ」

19 新拾遺二〇五 躬恒

20 万二の一二三 三方沙弥 「人まろⅡ」

21 万十一の二五七八 作者未詳 拾遺八四九人磨 「人まろⅠⅢ」

11と13の間に一首割り込みのように置かれている。14はⅡ本柿本集より万葉に本文は近い。作者注記が13と16だけに付されている。18は続古今Ⅱ本柿本集に近く、20は万葉に、21は逆に拾遺ⅡⅠⅡ本柿本集に近い。本文異同を問わず万葉集からの採歌と認めるにしろばらの配列である。連接が考慮されていないのだから、13Ⅰ15と18以下柿本集採歌と見なし得ない。どう考えたら整合できるのか。

18にまま見る例で古点の痕跡を認めたいのがある。

六帖本文

ぬば玉の我黒髪をひきぬらし

乱れて帰り恋渡るかも

図書寮本

むはたまのわかくろかみをひきぬらし

思ひてひさにけふわたるかも

校異には岡田本だけ大観本Ⅱ大系本に同じが示されている。

Ⅱ本柿本集Ⅱ続古今

む（続古う）ば玉のわが黒髪を泣きぬらし

思ひ乱れて恋渡るかな

万葉

ぬば玉のわが黒髪をひきぬらし

乱れてなほも恋ひわたるかも

大観は「乱れてかへり」とする。

三句以下「引奴良思乱而反恋度鴨」

もと六帖「ひき」とあったのか「なき」とあったのか判別できないが、「乱れて帰り」は「思ひ乱れて」とあったのではないか。後世の誰かが校合の際手を入れたのでは。六帖の活字本として、全体を通して大観本よりも図書寮本を善しと認めるが、「ひき」はともかく「けふ」は「恋ひ」の書き違いと思われる。図書寮本にもいくつかのあやまりがある（人に校合本作製を願うのは虫がよすぎるだろう）。

要するに、今日「引奴良思」と訓むのを「思乱而」と訓んでいる処を古点の痕跡と考えるのである。

もう少し配列について述べてみたい。

19は新拾遺集の編者が六帖から採歌し、その際16の「みつね」注が19にも及ぶと見なして躬恒の作者名を当てたと推測するが、間違っている。

この歌は古今集を溯って伝えられた古歌集から六帖は採歌したと考える。連接されていない配列であるから、きわどいのであるがどちらかというとそう考える（細い考証は措く）。15の方が認定しにくい。「ねぐたれの髪けづる夜も逢はざれば恋しきものを今日は暮らしつ」とある歌。

「ねぐたれ」ということばに注目して、『古典対照語い表』を手に取る。

万葉・古今・後撰には見ず、源氏物語に三例、枕草子に一例見ることを知る。「寝腐る」が蜻蛉日記にだけ一例。「寝腐れ髪」は枕草子にだけ一例見る。このことで、「ねぐたれ」は平安中期のことだと認定しなくなる。しかし、拾遺集一二八九の人磨の「猿沢の池に采女の身を投げたるを見て」の歌

わぎもこがねくたれ髪を猿沢の

池の玉藻と見るぞ悲しき

この歌大和物語百五十段、「人まろⅠⅢ」にも載る。いわゆる伝承歌である。枕草子の「池は」には「ねくたれ髪をと人丸がよみけむほど思ふに」とある。「けづる」を調べてみると、古今、後撰になく、万葉に一例（二五七八 あさねがみ我はけづらじ）。ことばの時代認定は離しく、古い時代のあらゆる歌を洗い出して認め得たとしても、平安の時代嗜好がことばの改変を侵したかも知れず、古歌であっても古語と認定できる保証はないのである。15は正しくは分からないが、伝えられた古歌集に拠ると考える（あちらかこちらかにつくとしたら、どちらかと言えばこちらのの見通し）。

B くだんの四首のうち柿本集、家持集とも関連のない例歌4をどう考えるのか。六帖編者の錯誤でなく採歌資料柿本集にあったからであろうのこちらを以下に示す。

人麿の注記を持つ六帖一三〇首の歌を更めて見直し、万葉に該当歌を持ち私家集に見えない歌を洗ってゆくと（ただし万葉で人麻呂歌集に載るとされる歌は除いて）、九首数えられる。うち一首は柿本集と次のような連関を持つ。

5 六帖五かがみ68

ます鏡手に取り待ちて朝な／＼

見む時さへや恋の繁けむ

二句大観本「取り待ちて」は植字の際の誤りであろう。大系本・図書寮本・万葉「持ちて」である。

万葉の該当歌は卷十一の二六三三作者未詳歌で、初句「真素鏡」とあって「まそ」と「ます」、三句「朝旦Ⅱあさなさな」と「朝な朝な」の異同を生じているが、平安朝そう訓まれていたということで、すぐ思い浮ぶ

のは「隠妻Ⅱこもりづま」を「かくれづま」と訓んでいた例などを含め「時代嗜好がことばの改変を侵した」と考える。

実は似た歌が卷十一の二五〇二 人麻呂之歌集出歌に見る。下句が「見れども君は飽くことも無し」とあり、ⅠⅢ本柿本集、拾遺集にも見える。ばくは上句か下句を違える歌を一律類歌として扱う（そして、類歌と人麿注記の関わりを一言述べねばならぬが今は措く）。既に二五〇二と二六三三の類歌は万葉集にいくつもあって、それなりに論じられている。

⑩の次のような考えは、こうした万葉研究が積み上げてきた成果をその基底で重ねているように思う。⑩は例歌3を、六帖四の連ね歌の創作遊戯を例に上げ、歌の歌いかえがあり得たし、歌いかえが伝誦に伝誦を生み、ある時点で原歌は人麻呂であるとの伝誦も付されて伝えられたのではないだろうかとする（ばくからすると、この示しはあちらで、こちらではない）。⑨が六帖の万葉歌について「やや複雑な伝誦性」「種々の流動動揺の経路を辿った」と指摘した内実を、一歩踏み込んだ⑩の推定であろうが、ばくは口誦伝誦を斥け転写伝承の側で考えるので、順の双六図歌の遊戯の例で補強されようと、書き伝えられた古歌をもとに遊戯としての安易な歌いかえが、別に古歌集の体で六帖まで伝えられたとは考えない。文字を手にした人々が、それでもなお口から口へと伝誦したので六帖の万葉歌がそのような歪みを生じたとは考えない。人の手から手への転写の際の書き違いや古点経由を考える。一字一句揺がせにしない今日の研究者は活字の恩恵に浴しているからで、ある作品を手にした後世の者がどれだけ校合本に腐心したかは定家の労で分かる。もし歌いかえがあり得たとしたら本歌取りと言われるものであろう。もつとも、例を示すだけである。

六帖三海05

伊勢の海の波間に下す釣の緒の

うちはへ独り恋渡るかな

続古今集恋の一〇五五 読人しらずとして四句「打はへ人を」となっている。続古今集も六帖から採歌したのであろう。六帖のこの歌「海」の冒頭にあつて以下拾遺集九二五の善祐法師の母の歌、是則の歌と続くので、六歌仙を溯る時代の歌と考えられる。

古今恋一の五一〇 読人しらず

伊勢の海の海人の釣り繩うちはへて

苦しとのみや思ひ渡らむ

小学館日本古典文学全集の本は「六帖三」を記すが、右の六帖歌を該当させているようである。ばくは類歌より更に関係が疎である参考歌と

表二 六帖が注記する人麻呂歌 ※ △は類歌

合 計	先行歌不明の歌	古 今 集		万 葉 集				
		よみ人しらす歌	伝人麻呂歌	他人作歌	作者不明歌	人麻呂関係		
						歌集歌	或云	作歌
130	22	6	5	4	31			
		11				49	4	9
						62		
		33		97				

人 麻 呂 作 歌	I ~ III 7	III 2
或 云	I ~ III 2	III 2
歌集歌	I ~ III 10	I・III 1 II・III 11 III 21
	I ~ II 1	ナシ 5
作 者 不 明 歌	I ~ III 6	I・II 6 II 7 II・III 2
	赤人 I ~ II	1 ナシ 8 △ I ~ III 1
他 人 作 歌	I ~ III 1	II・III 1 ナシ 1 △ III 1
伝 人 麻 呂 歌	I ~ III 3	II・III 2
よみ人しらす歌	I ~ III 1	△ II・III 1 △ III 1 ナシ 3
先行歌不明の歌	I ~ II 1	II 1 II・III 12 III 3
		ナシ 5

して扱う。古今集の歌の成立期であるが、前後古歌が配置されていて、読人しらずの時代と言われている時期のものであるが、六帖の歌と後・前が決められない。

さてよじけた話を万葉では作者未詳歌である歌が何故六帖では人麻呂と注記するかに戻す。表二は六帖人磨と注する一三〇首の内訳であるが、表一に従つて作つた。若干異なっているがわずかな違いである。私家集の関連を追うのが主旨。当該の九首のうち例歌5は類歌扱いなので、八首と示してある。この八首、巻七から四首、巻九から一首、巻十一から一首で、またぞろ異なり度合を持ち出すと、○が四首、あと二首は4と6で万葉寄り。残り二首が特殊な例で、共に巻十三の長歌末尾を短歌に改変した歌。異なり計測値一首2+1、一首2+4+5。後者を実際に示す。

六帖四ぬさ37

すへ神にぬさとりむけて我衣

ゆき逢板の山とほるかな

万葉十三の三二三六

須馬神尔奴左取向而吾者越往相山遠

(すめかみにぬさとりむけて

われはこえゆくあふさか山を)

およそ一二六〇首の六帖万葉歌のなかで、こうした長歌末を短歌に変えた歌は何首か、一当りしてみると、右の二首を除いて三首。第一帖霧10(第五帖くれどあはずに重出)が巻二の一九四 人麻呂。第三帖もしき13が巻六の九四八 作者未詳、「人まろII III」。第五帖人を待つ72が

卷十三の三二七六 作者未詳。ただし、この歌初二句を違えて卷十二の三〇〇二 作者未詳（短歌）にあり、これと六帖は同じ本文で、拾遺集恋三の七八二 人磨、「人まろⅡⅢ」にも見る。三首ともに現存していない柿本集に拠ったのかどうか（ちなみに逆に長歌の頭を採歌したのは一首で、第五帖わきもこ39が卷四の七二三 坂上郎女）。

卷七、卷九、卷十一の作者未詳歌がⅠⅡ本柿本集に見ることは言うまでもないことで、例歌4も「笠金村歌中」が着眼点ではなく、「巻九」の歌故に、六帖注記のうっかり間違いや書写のそれであれば、一本柿本集経由を想定する。

表二の古今集よみ人しらずの六首はどうか。現存柿本集と関連のない歌は三首ある。その三首に当たってみると共通している点があることに気づく。六帖五くれどあはず81が、古今恋三の六二〇と重なる。古今六二一の左注に或人曰く柿本人磨が歌なりとある。この六二一は六帖一雪70に人磨注記で載っている。残り二首は六帖二いなおほせ鳥05と六帖六かり99ととんでいるが、古今秋上の二〇八と二一〇に当り、二一一の左注に或人曰く柿本人磨が歌なりとある。二一一は六帖六秋萩85に人磨注記で載る。万葉左注の理解であるが、間違いなく誤りであろう。この拡大解釈の誤りを犯したのは六帖の編者だったのか、六帖が採歌資料に用いた柿本集だったのか。気になるのは古今二〇九が六帖六かり98、二一〇に当るから99の前に位置して人磨注記を外されていること。このことは、万葉での作者未詳歌に六帖が人磨の名を付すのを現存しない柿本集経由で見当づけ、古今集よみ人しらず歌も同様に考えてみることを阻む材料である。その一方、古今秋下の二八四は、ⅠⅢ本柿本集、拾遺人磨の名で載り、大和物語も人磨の歌として伝え、六帖六紅葉32に人磨注記で載る（図書寮本では言えなくなるが）。こちらは肯定材料。

判断を停止する。

表二についても一言述べるなら、先行歌不明の歌のⅢ本の三首と全く出典を見出せぬ歌五首も柿本集経由で六帖が採歌したと考える。

あわただしく今回のしめくりをつけねばならぬ処に來た。言われるところの伝承歌を、六帖が人磨と付する歌で見ると何が見えたか。六帖の万葉歌でいうと、古点の成果を採り入れた径路と柿本集を採り入れた径路を起点とした。前者は、未だ不分明で、⑫はもはや不可能な復原であろうと言う。後者については、⑧がⅠ本からⅡ本へと増補改訂をし、Ⅲ本の集大成はどのようなものであったかを教えてくれる。六帖が採歌資料とした柿本集はⅡ本に近く、Ⅱ本よりも歌数は多かった（⑩も指摘している）。両者は接合したのか。即ち、古点の成果を採り入れて柿本集は従来の文字を整合したり、歌を増補したのかどうか、古歌集が混入したのかどうか、何とも言えない。古歌集は存在していた。六帖にしか出典を見ない千首ほどの多くがそれに拠り、古今集読人しらず歌と重なると考えている。

六帖万葉歌と我々が今日照合して知る万葉訓とのずれは、長の歴史が訓み釈いてきた今日の訓と古点の訓のずれを忘れてはならないし、漢字以上に諸段階でのかな書写の動揺、変化が起きやすかった、六帖の伝本を含め手書きの写本の不幸の側で考えたい。万葉集と古今集以降とでは文字の有無で事情が一変して、口誦はわずかであったと考える。

四 六帖本文のずれを測定する試み

江戸期以後の写本しか遺されていない現六帖の本文はどの程度原六帖からずれているのか。先に示した計測基準を使って、未木和歌抄を介させて万葉と六帖の本文を比較する。

A 六帖にしか見ない歌 基礎数値として夫木抄が六帖と注し六帖にしか見ない歌の本文異同を洗ってゆく。夫木重出歌を含め二百十五首ほど。うち十五首は躬恒や深養父との名を夫木抄は記すが、六帖から採歌の際誤って名を付した歌が含まれている。大観本の誤植が異なり差の小さいものでも三首あたりするが、二百首のうち本文が一致するものが六六首、異なり値3以内のものが五十首ほど。半数はほぼ一致する。二百首の平均異なり値は三・二五。

B 六帖注を夫木が示し、六帖の他に勅撰集、私家集等の別資料を持つ歌 四六首ほど。ほぼ異なりを、六帖、別資料、夫木抄で同じくする歌を除いて、夫木抄の歌が六帖に近い数十首、別資料に近い数四首。夫木抄と六帖の異なり値平均は四・〇七。四六首で異なり値3以下は二八首。

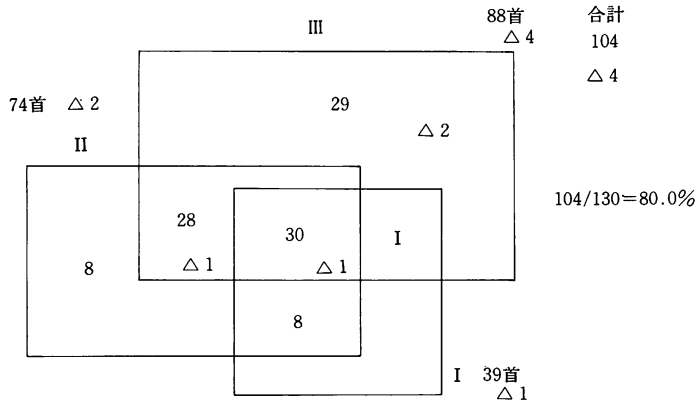
C 夫木抄が六帖を注し、万葉集にも見る歌で、人麻呂・赤人・家持と万葉が示すか、私家集に見られる歌 六十首ほど。平均異なり値五・九八。六帖に近い本文を持つ歌十首。万葉等に近い本文を持つ歌二一首。逆転現象が生じている。

D 夫木抄が六帖注を示し読人しらずとする歌で万葉集に見られる一九〇首ほど。夫木抄が一本でも六帖注を示せば拾った数。

E 夫木抄が万葉注を示している歌で六帖にも載る歌四百首ほど。D、Eとも異なり平均値は4前後。厳密な計数を尽くすほどの程度の時間がかかるのか。或はことばの異なりの解析でもいい。ばくは試算しただけで興味を失ってしまった。というのも、原生林に分け入って四千五千の樹木を数えているうちに、これでは樹海の姿は分らないと無意味さに道を失ってしまったからである。

(昭和五十五年十二月一日受理)

表三 130首と柿本集



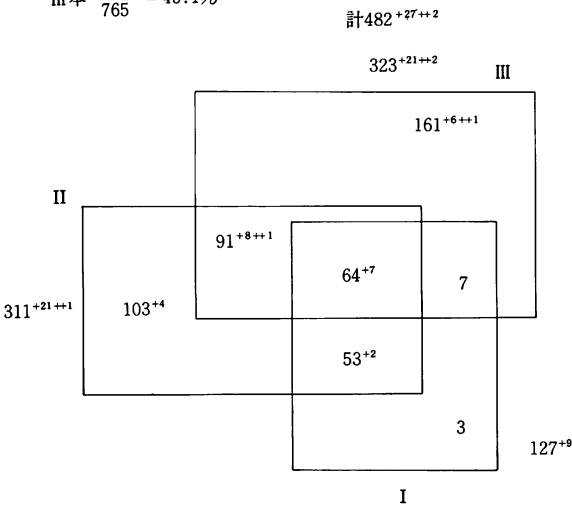
表四 六帖万葉歌と人麻呂

万葉卷											
	一	二	三	四	六	七	八	九	十	十一	十二
0		人 ₂ ^{・1}	他 ₂ ^{・1}			歌 ₁ ^{・4}		他 ₁ ^{・13} 歌 ₁ ^{・1}	歌 ₁ ^{・1}	歌 ₂ ^{・3} ^{・1}	
I	人 ₍₁₎ ^{・1} 他 ₂ ^{・1}	人 ₉ ^{・2}		人 ₃ ^{・1} 他 ₁ ^{・1}		歌 ₆ ^{・6}	他 ₁ ^{・1}	人 ₂ ^{・1} 歌 ₁ ^{・1}	歌 ₃ ^{・5} ^{・1} ^{・4}	歌 ₁₃ ^{・2} 歌 ₁₅ ^{・1}	未 ₆ ^{・1} 〔1〕
II		他 ₃ ^{・1}		他 ₁ ^{・1}	未 ₁ ^{・1} 他 ₁ ^{・1}	歌 ₁₁ ^{・7} ^{・2}	他 ₁ ^{・1}	他 ₁ ^{・1}	歌 ₃ ^{・4} ^{・7} ^{・1} 〔1〕	歌 ₈ ^{・1} 未 ₆ ^{・7} ^{・1}	歌 ₂ ^{・2}
III		歌 ₁ ^{・1}	人 ₇ ^{・1} 〔2〕	人 ₃ 〔1〕		歌 ₁₀ ^{・1}		人 ₂ ^{・1} 歌 ₃ ^{・1}	歌 ₂₀ ^{・6} ^{・2}	〔1〕33 ^{・3} ^{・1} 未 ₆ 〔1〕	歌 ₂ ^{・1} 〔1〕
	3〔1〕	17 ^{・2}	9 ^{・2} 〔2〕	8 ^{・1} 〔1〕	2	45 ^{・2}	2	24 ^{・1}	192〔1〕 ¹⁹ ^{・1}	147〔1〕 ¹¹ ^{・1}	13〔1〕
計											
0	未 ₂ ^{・1}					人 ₂ ^{・1} 歌 ₁₇ ^{・1} 未 ₁₁ ^{・1} 他 ₃ ^{・1}					
I	未 ₁ 〔1〕		未 ₂ 〔1〕		他 ₁ ^{・1}	人 ₁₆ ^{・2} 〔1〕	歌 ₂₃ ^{・2}	未 ₈₁ ^{・5} 〔5〕	他 ₆ ^{・1}		
II			他 ₁ ^{・1}	他 ₁ 〔1〕		人 ₀ ^{・14} ^{・1}	歌 ₁₃₄ ^{・10} ^{・1} 〔1〕	他 ₉ ^{・1} 〔1〕			
III	未 ₁ ^{・1}	歌 ₂ 〔1〕	未 ₃ ^{・1} 〔2〕			人 ₁₂ ^{・1} 〔3〕	歌 ₇₁ ^{・3} ^{・1} 〔3〕	未 ₇₇ ^{・3} 〔4〕	他 ₀ ^{・1}	合 計	
	4〔1〕	2〔1〕	6 ^{・1} 〔3〕	1〔1〕	1	人 ₃₀ ^{・4} 〔4〕	歌 ₁₂₅ ^{・6} ^{・1} 〔3〕	未 ₃₀₃ ^{・19} ^{・1} 〔10〕	他 ₁₈ ^{・2} 〔1〕	476 ^{・31} ^{・2} 〔18〕=〔+9〕	

※ 人＝人麻呂 歌＝人麻呂歌集 未＝作者未詳 他＝他人歌
六帖を軸にとっているので、万葉からすると 476－31－4＝441
〔 〕は万葉の重出
I～III本の重なりは無視している。0は柿本集にないことを示す。

六帖 採歌率

I 本 $\frac{127}{241} = 49.0\%$
II 本 $\frac{311}{644(577)} = 50.1\%$
III 本 $\frac{323}{765} = 45.1\%$



表六 六帖と柿本集

表五 六帖非万葉歌と人麻呂

	古今 或人日人麻呂	古今 読人不	他資料有	他資料無	
0		6	新古今読 人不	4	11
I	3		後撰伊勢と 紀允恭		3
II	2	1 天皇 古今或人日	他 ₂	34	39
III		奈良帝	〔家持I II〕と 2 催	5	7
	5	7	5	43	60

△ 1
〔他に勅撰か人丸とする歌6^{・1}〕

表 七 家持と六帖

万葉巻	万葉家持	家持・I II	I II作者 未詳	I II人歌	I II他	六帖家持	
二					1		1
三	4	2			3		9
四	21				2 ⁻¹		23 ⁻¹
六	3						3
七						1	1
八	19 ⁻¹	2			9	1	31 ⁻¹
九					1	1	2
十			32 ^{+1 ++2}	3		3	38 ^{-1 ++2}
十一			1	1		1	3
十二			1			1	2
十三						1	1
十七	4					1	5
十九	27 ⁻²				3		30 ⁻²
二十	12						12
計	90 ⁻³	4	34 ^{+1 ++2}	4	19 ⁺¹ _[+1]	10 _[+1]	161 ^{+5 ++2} _[+2]
	古・読人不知	古・他	後読人不知	後・他	資料有	無	
家持集 I II	10	7	1	5	4	8	35

△ 2 + 1

〔 六帖家持 1 古今大歌所御歌 〔 非 2 玉葉と新古家持 △ 1
出典未詳 (万の他人哥を)

表八 赤人と六帖

万葉集	赤人	赤人 I II	I II作者 未詳	I II人哥	I II他	
三	4	1				5
六	3	1				4
八	3	3	1		2	9
十			73 ⁺²	8		81 ⁻²
	10	5	74 ⁻²	8	2	99 ⁻²

△ 1 他に〔 赤人 I ・千里〕 5 + 1

六帖採歌数

参 考

大伴坂上郎女 28 笠女郎 23
湯原王 ・ 笠金村 12 高橋虫麻呂 9
紀女郎 7
弓削皇子・安倍虫麻呂・大伴旅人 6
高市黒人・志貴皇子・橘諸兄・大伴像見 5

表 九 万葉集・勅撰集・古今六帖と重なる歌

	該 当 歌	うち人麿歌	類歌	摘 要
古 今	6		△ 6	6 (黒減 1 異本 2)
後 撰	9			拾遺重 2 玉葉重 1
拾 遺	79 ¹	57 ₍₁₁₎ △ 3	△ 5	古今重 1 △ 3
新古今	39 ⁺¹	14	△ 3	古今異本重 1
新勅撰	28 ⁺²	4		統後撰重 1
統後撰	14 ⁺¹	3		
統古今	24 ⁺²	9		
玉 葉	34 ⁺⁴	6		万葉旅人を家持とする一首有
続千載	4	1		他に六帖拾遺歌 一首有
統後拾	14 ⁺²	4		
風 雅	15 ⁺²	2		六帖人麿を読人不知とする二首有
新千載	21 ⁺²	5		続千載重 1
新拾遺	13 ⁺¹	4		
新後拾	1			
新統古	6	2		
計	307 ⁺²⁴	111 ₍₁₁₎ △ 3	△ 14	

※ +は六帖が重出している数。六帖の側でいうと307+24=331となる。

[]は拾遺が重出している数。拾遺の側でいうと 79+1